

# 続・保育の中の小さなこと大切なこと

守 永 英 子

私たちの園では、春と秋と、年に二度の遠足をする。春は母親といつしよで、秋は、子どもだけでバスで行く。十月六日は、三才児クラスの子どもたちにとつては、初めて、親から離れて、自分たちだけで行く遠足であった。

手を振つて見送る母親たちを残して、バスが出発して間もなく、男児Nが、にこにこしながら、「なんだか、おうちに帰るみたい」と言う。登園の時とは違つて、帰りは、お友だちといつしよだからであ

るうか。母親と別れてきた不安はなく、少し、はしゃいだ気分でさえあるように見える。「このバス好きになつちゃつた」と、又、Nが言う。Nの心の動きを面白く思つて「なぜ?」と問い合わせる私に、Nが説明してくれた。「だって、いすが、こう（前向きになつて）いる（という意味らしい）なつて いるでしょ。普通は、こう いうふうに（手で横に長くつながつて いる様子を示す）なつてるよね」そして、いつも乗るバスと違うところを見つけようとするとかのよ

うに、周囲を見まわして、「ガラス（前面の）の上の方が青くなつてゐるし、上方（天井）も新幹線みたいになつてゐる（換気口のことらしい）……ほら、たゞこの灰を入れるところもある！」

「そうね」と答えながら、私は、このバスとNの言葉の対比を面白く思つた。といふのは、このバスは、もう十数年も大学で使つていて、買替えの話も出ているほどで、古くて、お世辞にもきれいとは言ひ難いものであつたから。

Nは、バスを好きになつた理由を、バスの側に求めたが、私から見れば、それは、Nの側に求められるべきものであつたようだ。Nが遠足を、うれしく、はずんだ気持で受けとめていることによる周囲の“見え方”ではないだらうか。

“見え方”的問題は、3月号、7月号でも、女兒Tの話として触れたが、随分興味深い問題を含んでいるように思われる。このことは、子どものみに限らない。おとなも又、この問題にぶつかるのである。

遠足といえば、子どもたちが並んで歩く姿が、すぐ、目の前に浮かぶなど、“並んで歩くこと”は、当然なこととして受けとめられている。ところが、今年の私のクラスは、それが、どうもうまくいかなかつたのである。一学期には、並んで歩けず、すぐにバラバラになつてしまつたこのクラスも、秋の遠足や運動会の頃には、歩けるようになるだらうという私の期待に反して、この時期になつても、一向に、上手に並んで歩けるようにならない。運動会も近いことでもあるし、いささか焦りを感じて、手をつなぐ相手を考慮しながら、男児と女兒を手をつながせ、前後の関係も、なるべくトラブルが起こらないようにと配慮して並ばせても、歩き出すと、すぐ行列が乱れてしまう。「Aちゃん、あなたは、○○ちゃんの後でしちゃう。追いこさないで、並んで歩きましちゃう」と言つて見ても、にこにこと楽しんで歩いている子どもには通じないで、どうも、私の一人相撲のようである。

苦笑しながら、私にとって“並んで歩くこと”とは、どんなことであろうかと、ふと考えてみた。そ

ういえば、おとなになつてからは、あまり並んで歩かせられた記憶がない。駅などで、人の後について歩かなければならぬときは、“歩きにくい”と少々不快に感じ、なるべく、人の少ないところを歩こうと思う。並んで歩かされた一番近い記憶は、高校の修学旅行であろうか。お寺や仏像を、並んで歩きながら見ることは、あまり愉快なことではなかつた

ようと思う。

つまり、“並んで歩くこと”は、私にとって、あまり愉快なことではなかつたにもかかわらず、私は、それを、子どもにもとめていたのである。そう思つた時、二十数年間も、当然のように、“並んで歩くこと”を求めていた自分に、驚きすら感じた。では、なぜ、集団生活の中で、“並んで歩くこと”が必要なのであろうか。“並んで歩けるようになる

ことは、子どもの成長のために必要不可欠なこと”なのであるうか。

どうも、これは、“おとなにとつての、集団管理上の便宜さ故ではないだらうか”と思えてきたとき、“並んで歩くことの出来ない子ども”に対する私の“見え方”もどうやら変ってきたようである。（お茶の水女子大学附属幼稚園）

